



Title	人は何故オカルト打法に走るのか : ヒュームとウィトゲンシュタインを手がかりに
Author(s)	溝越, 大秦
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 161-167
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100170
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集3

第13回臨床哲学フォーラム（シリーズ：規範の外の生と知恵）

テーマ：パチンコ・パチプロの哲学

人は何故オカルト打法に走るのか

ーヒュームとウィトゲンシュタインを手がかりに

溝越 大秦

序

本発表は、いかにしてパチプロ・スロプロが生きてきたの以下、ということを追求するものではない。むしろ、一般的なパチンコ・スロット（以下パチスロ）ユーザーに焦点を当てた発表とも言える。本発表の問題意識は、パチスロにおける無根拠な打ち方として忌避されることの多い「オカルト打法」になぜ人が走るのか、というものである。

まず、パチスロの基本的な理論や技術を紹介し、その後で「オカルト打法」とは何か、そしてその種類にはどのようなものがあるのかを説明する。そして、オカルト打法に走る原因として考えられる事象を挙げ、その事象から生じるパチスロ遊技者の心的状態をヒューム、ウィトゲンシュタインの観点から分析する。

1 パチスロ概説

パチスロの一般的な勝ち方やオカルト打法の事例紹介、遊技者の心的状態の哲学的分析の前に、パチスロの概要を説明する。パチスロとはパチンコ・スロットの略称であり、それぞれ遊び方やレート、ゲーム性が異なったものである。

パチンコは筐体左下から玉を発射し、筐体中央下の「ヘソ」と呼ばれる部分に入ることによって大当たりの抽選が行われる「回転」、そして「保留」が発生する。保留とはパチンコの玉がヘソに入った際に画面に現れる当落の抽選券のようなものである。その色は一般的に金、赤、紫、緑、青、白と分けられており、左記の順で当たりやすいと言われている。ヘソに向かって玉を発射する時は「左打ち」と呼ばれる。当たれば筐体右の「電チュー」と呼ばれる箇所から玉を発射する。これを「右打ち」と言い、右打ち中は次回の大当たり確率が変わらないまま保留を貯めることができる「時短」と次回の大当たりへの確率が大幅にアップする「確変（確率変動）」と呼ばれる2種類の時間が大きく分けて存在する。

スロットは、メダルを三枚入れた後にレバーを押して3つあるリールを回転させ、左、中、右にあるボタンを押してリールを停止させる。停止した時の出目に応じてメダルが払い出される。「小役」と呼ばれる出目が揃うと、特定の演出が発生し、ボーナス（当たり）に近づく。ボーナスにはレギュラーボーナスとビッグボーナスがあり、後者の方が払い出し枚数が多い。スロットには「設定」と呼ばれる、当たりやすさが台毎に違う仕様があり、設定1～6に分かれていて6が一番当たりやすい。ビッグボーナスには設定差は少ないものの、レギュラーボーナスには設定差が大きい場合が多い。

パチスロには、勝つための様々な理論や技術が存在する。例えば、パチンコは回転数が1000円毎にどれだけ発生するかでその台が勝ちやすいかどうかを判断する「ボーダー理論」と呼ばれるものがある。他にもパチスロには、「目押し」と呼ばれる、狙った出目を止める技術や、それがさらに発展した、狙った出目を狙った位置に止める「ビタ押し」あるいは「ビタ止め」という技術がある。

他にもさまざまな技術や理論が存在するが、代表的なのはこの二つであろう。それらはパチスロで勝つためには必要不可欠な理論及び技術であり、身につけていなければパチスロで勝つことが非常に難しくなってくる。しかし、実際の勝ち負けに関係ない打法も存在する。それがオカルト打法である。

2 オカルト打法事例

パチスロには先ほど紹介した技術や打法以外に「オカルト打法」というものがある。「オカルト」とは一般的に超常的・超自然的という意味ではあるが、パチスロ界でオカルト打法は「無根拠な打ち方」という意味で使用される。実際の勝ち負けには影響しないにも関わらずその打法で打つ人は「オカルター」とも呼ばれる。

ではオカルト打法にはどのような種類があるのか。YouTubeで動画制作活動をしている「レジスタンス」というグループが「【狂気!?】パチンカスの「イカれたオカルト」15連 発!! 【幻想】(URL: <https://youtu.be/x6jF0dnQ6Mg?si=rwsxiRDzUN2Ty0N9>)」で視聴者から募集した事例を見ていく。以下のとおりである。

- 1 洋楽を聴きながら店に行く
- 2 他人に親切にし、善行を積む
- 3 背筋を伸ばして打つ
- 4 筐体横の充電ポートを使用せず打つ
- 5 当たりが終了しそうな段階で上皿の玉を抜く

他にもあるが、以上が当該動画で挙げられていた代表的なオカルト打法である。これらは全て無根拠な打法であり、実際の勝ち負けとは関係がない。それでも、以上のような打法に走ってしまう人は少なくない。他にも、発表者の弟はパチンコ「P新世紀エヴァンゲリオン 未来への咆哮」という機種 of 演出に対して以下のような発言をしている。(発表使用許諾済み)

「赤保留レイ背景は85.4%。普通に外れるからアツいっちゃアツいけど祈る。」

という発言である。85.4%とは高確率と言われることが多いが、発表者の弟の発言からは「普通に外れる」そして「祈る」という言葉が出てきている。「祈る」という行為にここで哲学的な考察を進めるつもりは無いが、当たるか外れるかにおいて無関係であることは変わりなく、広く取ればオカルト打法に属するであろう。

ここで注目しておきたいのは、「85.4%。普通に外れる」という点である。これは、

一種の懷疑状態にあると思われる。つまり、「85.4%の確率であるが、実際は祈りを必要とするほどのものではないか。」という懷疑状態である。

したがって、「人はなぜオカルト打法に走るのか」という問いは「人はなぜパチスロの演出に対して懷疑的になるのか」という問いに置き換えられるだろう。次節より、そのような懷疑状態になぜ陥るかを哲学的に分析するため、懷疑論者として有名なデイヴィッド・ヒューム、そして懷疑論者に対して考察を広げたルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの議論を挙げ、パチスロ遊技者の心的状態の分析の一助にしていく。

3 パチスロ遊技者の心的状態-ヒュームの観点から

デイヴィッド・ヒューム(David Hume), (1711-1776)は1711年、スコットランドのエディンバラの法律家で地主の家に生まれる。1723年にエディンバラ大学に入学するも、1725年に退学。家族の期待に応じ法学を勉強するものの、哲学に強い興味を惹かれ、貿易商を経て1739年に『人間本性論』第一巻知性編と第二巻情念編を匿名出版。翌年第三巻の道徳編を出版。無神論や悪徳の本などと批判され、「早く出版し過ぎた」と後悔する。1749年頃から『人間本性論』が評価され始めるが、終生大学の教授職にはなれなかった。1776年エディンバラにて没する。本は発表ではヒュームの観念論と自我論が書かれている『人間本性論』第一巻知性編を取り扱う。(レジュメ中にて適宜『人性論』と略記する。)

ヒュームはまず人間の知覚を「印象」と「観念」に分ける。印象は「最大限の勢いと激しさを伴って精神に入ってくる」(『人性論』第一巻,第一部,第一節,第一段落)(以下、『人性論』1,1,1,1)というようにアラビア数字で表記する。)ものであり、観念は「思考や推論に現れる、それらの印象のない像」(ibid.)である。観念は記憶、想像へと印象から離れていく。パチスロの演出Aの印象は、記憶A' となり、想像aとなる。

観念は「単純観念」とそれらが合わさった「複合観念」に分けられる。単純観念の連合から複合観念が形成され、時間や空間、同一や類似などの「関係」と呼ばれるものが生まれる。単純観念は、それに対応する単純印象からのみ生まれる。(『人性論』1,1,1,7)(『人性論』1,1,1,8)印象が観念に先立つことを豊川(2017)は「先行原理」、単純印象からのみ単純観念が生まれることを「コピー原理」と呼ぶ。これはヒュームも「一つの一般命題」(『人性論』1,1,1,7)と言っている。

空の青さと青の単純観念は鮮明さの点で異なるのみで、内容は同一である。豊川(2017)はこれを類似原理と便宜上呼ぶ。しかし、この先行原理やコピー原理が、のちにヒューム哲学を懷疑論と呼ばれる立場まで追い詰めてしまうのである。

一般的に、学問を基礎づけるものとして「AがBの原因である」というような「因果関係」の特定が挙げられる。パチスロの解析も、Aの演出によって当たりが期待できるというが、それが当てはまるだろう。ヒュームは、先に挙げた先行原理とコピー原理から、次のように述べる。

われわれは印象から生じないようないかなる観念ももっていないので、われわれは、もし必然性の観念をわれわれが実際にもっていると主張すると、この必然性

をいかなる何らかの印象を、見つけ出さねばならない。(『人性論』1,3,14,1)

ヒューム哲学の枠組みでは、何かしらの必然的な印象を伴わねば必然性を持つ観念を獲得することはできない。しかしながら、ヒュームは以下のように述べる。

私は、直ちに、それらの(観察)対象が時間と場所において互いに隣接していること、また、われわれが原因と呼ぶ対象がわれわれが結果と呼ぶ対象に先行していること、を見て取る。(中略)私は、頻繁な反復の後では、対象の一つが現れれば、精神が、習慣によって、その対象にいつも伴っていた対象を考察するように、また、それを、その最初の対象に対する関係のゆえに、より強い光のもとで(より生き生きと)考察するように、決定されていることを見出す(『人性論』1,3,14,1)

つまり、ヒュームにおける因果関係はあくまで印象から観念に移り変わったものの、習慣による結合である。一方、因果性について、ヒューム自身、「必然的結合が考慮されるべき」(『人性論』1,3,12,11)と述べている。これは明らかに関係という複合観念への要請ではあるが、それは関係の単純印象を要請せねばならず、コピー原理と衝突し、確実な知識を得られないことになる。

必ず観念は印象から生じ、印象が最も強く、観念は記憶、想像という風に印象から離れていく。そして確実な印象というものは存在し得ないため、確実な知識としての観念は生じ得ない。つまり、確定でない演出、確からしい演出である限り、演出の印象と確実に「当たる」という観念とは結びつかないのである。

以上のことから、パチスロ遊技者の心的状態は次のように表される。すなわち演出Aの印象とハズレの観念の結合は、演出Aで当たるという関係の観念りも強く、習慣に反映されやすい、というものである。いかに解析で85.4%と出ていたとしても、外れた印象に伴う観念、結合が強ければ、それだけで演出Aと結合された当たりの観念は弱まるか、打ち消されてしまう。パチスロ遊技者は以上の理由から、オカルト打法に走るという面もあるだろう。

一方、演出Aが当たる確率が85.4%という解析が正しい場合、それでも演出Aの確率を疑うということはどういうことか。その確実性に対する懐疑はどのような心的状態で行われるのか。次節以降、懐疑論者に対して確実性という観点から考察を広げたルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの議論からそれを紐解く。

4 パチスロ遊技者の心的状態-ウィトゲンシュタインの観点から

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン(1889-1951)はオーストリア・ウィーン出身の哲学者である。1912年にケンブリッジ大学に入学。1914年、第一次世界大戦の勃発により、志願兵となる。そこで書き留めた原稿を元に、1922年に主著『論理哲学論考』を出版する。出版後、「哲学の問題は全て解決された」と言い、小学校教師に就く。1929年には『論理哲学論考』の業績が認められ、博士号を取得。1939年、ケンブリッジ大学の教授となり、『論理哲学論考』の反省とともに手稿を書き連ねながら思索する

も、出版の形 にすることができず1951年に癌で死去。没後、膨大な遺稿の中から『哲学探究』が出版される。両著の 決定的な違いから『論理哲学論考』の時期を前期、『哲学探究』の時期を後期哲学と呼ぶことが多い。今回扱うのは最晩年の以降よりまとめられた『確実性の問題』(On Certainty (以下、OC。引用箇所は§とアラビア数字で示す。))である。

ウィトゲンシュタインは『確実性の問題』にて、懐疑論者への、懐疑の解消を提示する形で議論を進めていく。まずは、あらゆるものを疑ってしまう懐疑論の問題点を例示して指摘している箇所を取り上げたい。以下の通りである。

私が実験を行う場合、眼前の実験器具の存在を疑うことはしない。私が疑うことはいくらかあろうが、それを疑うことはしないのだ。私が計算をする場合、紙に書いた数字がひとりでに入れ替わることはないと信じて疑わず、また終始自分のきおくをあてにし、無条件に信頼する。(OC § 337)

化学の実験で、化学の実験器具が目の前に存在するかどうかを疑うことはない。あるいは、ある気体や液体の実在だったり、それが突然目の前が消えないことを疑ったりすることはない。ここからさらにウィトゲンシュタインが懐疑論者に対して提示する代表的な議論として、蝶番の比喻というものを展開する。以下のようなものである。

すなわち、我々が立てる問題と疑義(原文傍点)は、ある種の命題が疑いの対象から除外され、問いや疑いを動かす蝶番のような役割をしているからこそ成りたつのである。(OC § 341)

一見難解なように見えるこの比喻ではあるが、懐疑論者が陥るある点を明確に突いている比喻である。以下の引用を見ながら、解きほぐしていきたい。

つまり科学的探究の論理の一部として、事実上疑いの対象とされないものがすなわち確実なものである、ということがあるのだ。(OC § 342)

ただしこれは、我々はすべてを探究することは出来ない、従って単なる想定で満足せざるをえないという意味ではない。我々がドアを開けようと欲する以上、蝶番は固定されていなければならないのだ。(OC § 343)

山田(2009)はこれについて、我々が惑星を探索する際、光学理論や望遠鏡などを疑わないように、全てを疑うことは探究上不可能であることを言っていると指摘する。(山田(2009), p.86) 発表者もその解釈に同意する。つまり、何かしらを知ろうと問いを立てる時、世界や自分の実在については誰も疑わない。この、ある探究において確実に疑われ得ない命題はウィトゲンシュタイン研究において「蝶番命題」とも呼ばれている。

山田(2009)はそこから、蝶番命題が成立しない場合、それは別のゲームとして成

立してしまうとも言っている。すなわち、サッカーでボールが突然膨らんだり萎んだりすることを疑ってしまえば、それはサッカーではなく別のゲームになってしまうということである。(山田 (2009) , p.88-89)

以上のことを受け入れても、懐疑論に陥る者もいる。その難しさを、ウィトゲンシュタインは以下のように言い表す。

端緒を見つけるということが実に難しいのだ。言い直せば、始めるところで始めてそれ以上遡らないことが難しいのである。(OC § 471)

つまり、ある探究の始めにある「実験器具が実在する」、「ボールが突然膨らんだり萎んだりしない」という元の事実を受け入れ、それ以上疑いを持たないことが難しいということである。ウィトゲンシュタインの蝶番命題は、ある探究あるいはゲームの基本的な、確実でなければならない命題であり、それを疑えば別のフィールドへと変化してしまう。

パチスロで言うならば、85.4%の確率すら疑ってしまうと、別のゲームになってしまうということである。85.4%を疑うようになれば、それは確率や期待値を追い続けるゲームではなく、「確率の低い当たりをいかにして引くか」というゲームになる。オカルト打法で重要なキーワードとして「引き」という概念がある。いかにして自分が当たりを「引く」か、「引き」が強ければ当たりを「引く」ことができる。その「引き」を強めるだろうと様々なオカルト打法が試されるという、パチスロとは違うゲームがそこには存在する。つまりオカルト打法に走る人はパチスロというゲームともう一つ、己の「引き」をどこまで高められるかというゲームを遊技しているのである。

終 人間の合理性

今回のセッションにて、様々なオカルト打法を紹介し、それに走る人がどのような心的状態であるかをヒューム、ウィトゲンシュタインの観点から説明した。ヒューム的に言えば、演出の印象と当たりの想像の観念よりも外れの想像の観念の方がより強く結びついている場合にオカルト打法に走り、ウィトゲンシュタイン的に言えばパチスロとは違う「引き」を高めようとするゲームに参加しようとするオカルト打法に走ることになる。ただヒュームの観点からは、外れの観念が当たりの観念よりも強く結びついてしまうことについてヒュームの文献学的根拠に乏しくなってしまったので今後の課題にしたい。

ただし、オカルト打法にも一つの合理性（明らかにパチプロ・スロプロとは違う合理性ではあるが）がある。伊藤邦武著『人間の合理性の哲学』では、パチプロ・スロプロが追いかけるような「数学統計的に正しい確率」と、「人間的な確率」の違いの観点から、人間的な合理性とは何か、が書かれている。彼は本著の第三章で、『論理哲学論考』の英訳にも携わったフランク・ラムジーの議論を援用しながら、人間の論理では、推論は習慣によるものであり、人間の合理性とは、個人が自身の習慣の有用性を自己批判的に吟味し、より合理的な習慣へととらえようとするものであると説明する。その

ような精神的習慣において、われわれは自身の行動の成功や失敗を検証し、その有用性の追求と、自己反省という両面を兼ね備えているという。オカルト打法に走る者には、そのような自己反省と習慣作りという合理性に則った面もあると言えかもしれない。

参考文献

『人間本性論 第1巻:知性について』、デイヴィッド・ヒューム、木曾好能訳、法政大学出版局、1995年2月28日

『ヒューム哲学の方法論: 印象と人間本性をめぐる問題系』、豊川祥隆、ナカニシヤ出版、2017年3月31日

『西洋哲学史』、バートランド・ラッセル、市井三郎訳、みすず書房、1969年10月30日・『人間的な合理性の哲学 パスカルから現代まで』、伊藤邦武、勁草書房、1997年10月5日

『ウィトゲンシュタイン最後の思考 確実性と偶然性の邂逅』、山田圭一、勁草書房、2020年7月20日

『確実性の問題』、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン、黒田亘訳、大修館書店、1975年6月20日

(みぞこし・たいしん)